

東北農政局長賞受賞

大崎耕土を潤す内川の美しい流れと憩いの場を後世へ

受賞者 うちかわ 内川・ふるさと ほぜんたい 保全隊
みやぎけん おおさきし
 (宮城県大崎市)

■ 地域の沿革と概要

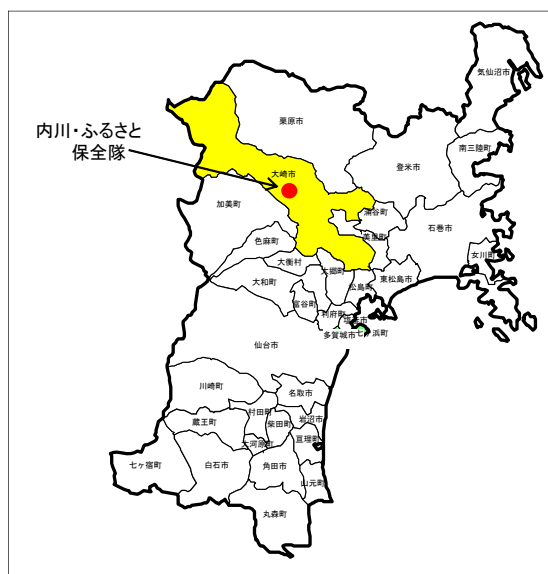
大崎市は、平成18年3月31日に1市6町が合併して誕生した。宮城県の北西部に位置しており、北は秋田県、西は山形県と接し、東西に約80kmの長さを持っている。大崎市の中心部及び東部一帯は、奥羽山脈から江合川と鳴瀬川の豊かな流れによって形成された広大で肥沃な平野で、「大崎耕土」と呼ばれており、「ササニシキ」や「ひとめぼれ」などの米どころとして知られている。また西部では大規模な畜産や野菜の生産が盛んに行われ、市内一円が食材の宝庫となっている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

内川・ふるさと保全隊が活動する岩出山地域（以下「地域」という。）は、大崎市のほぼ中央に位置し、伊達政宗が仙台青葉城へ移る前の12年間を過ごした城下町である。岩出山城跡「城山公園」や、

第1図 位置図



第1表 地域の概要

事項	内容	
地区の規模	旧市町村単位の集団等	
地区の性格	地縁的な集団等	
農家率 (内訳)		15.2%
	総世帯数	46,146戸
	総農家数	7,001戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家	959戸
	1種兼業農家	986戸
	2種兼業農家	3,720戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	79,676ha
	耕地面積 ^{※1}	19,100ha
	田	16,700ha
	畑	2,360ha
	耕地率	24.0%
	農家一戸当たり耕地面積	2.7ha

注: H22大崎市の数値

※1 四捨五入のため計と内訳が一致しない場合がある

国指定文化財となっている岩出山伊達家の家臣子弟の学問所「旧有備館及び庭園」など、歴史的建造物や遺構が今でも数多く残っており、城下町特有の風情漂う町並みとなっている。



写真1 内川の清流

活動の拠点内川は、伊達政宗が岩出山城の防備を担う外堀、新田開発のためのかんがい用水路、及び治水のために江合川を分水して設けた人工水路であり、現在も下流域の大崎耕土3,300haの広大な農地に水を供給し、農業生産基盤を支えている。

また、現存する日本最古の学問所である「有備館」から内川沿いに整備された約1.6kmの遊歩道は、京都市左京区の琵琶湖疏水沿いの「哲学の道」にならって「学問の道」と名付けられ、平成18年2月には「全国疏水百選」にも選ばれるなど、城山公園、有備館と並ぶ岩出山のシンボルとして観光名所ともなっている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

地域は、大崎耕土を潤す内川の流れる城下町として発展した市街地から、下流域の農村集落にまたがっており、市街地は、周辺農村集落の商店街としての側面も有している。

内川の水は、農業用水のほか伏流水を利用した醸造業や特産の凍み豆腐など、地域産業にも幅広く活用されるとともに、生活や環境用水として、四季を通じて住民の心をなごませ、潤いを与えてきた。

昭和50年代に入り、生活様式の変化から内川を流下するゴミの量の増加と汚濁が進み、上流市街地の周辺環境と下流の農業用水利用者への影響が懸念されるようになった。

このような状況の中で、国営かんがい排水事業による内川改修の計画が持ち上がり、国営大崎西部地区調査、同地区全体実施設計により、昭和63年から国営事業として着工し、最大流量を増やすため、内川の断面を拡幅して、コンクリート3面張りに改修するという計画が作られた。

計画が明らかになると、多くの住民から内川が旧城下町を流下し、地域住民の生活の一部となっていることや、岩出山城の外堀を成しているなど、内川がもつ役割や歴史的背

景に配慮してほしいとの声が数多く寄せられたため、予定していた改修工事を延期し、町民の声を反映した改修方法を検討することになった。

イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

こうした動きの中で、昭和63年10月に小・中学校の校長経験者等有識者を含む内川沿いの住民有志約200名が「内川を考える会」を組織し、内川の改修にあたり、町民の声を反映していくための要望（請願5ヶ条）をまとめた。

第2表 請願5ヶ条

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1 旧町内を流れる内川区域は、現在の景観を保持し、川幅、河床はできる限り現状通り施行すること。2 各分水路には冬期間も通水されるようにすること。3 有備館の保全について池の水の確保を含めて万全を期すこと。4 自然環境保全のため、魚槽ブロック、ホタルブロック等の使用を考慮すること。5 安全確保のため施策には十分留意し施行すること。 |
|---|

請願5ヶ条は、天然石による石積み護岸と周辺の樹木・緑を維持することを基本事項とする物で、住民と行政の連携により改修計画に反映されることとなった。

旧岩出山町は、内川の修景を観光の目玉とするため、県営水環境整備事業による内川修景計画を策定し、水路断面を拡幅する国営かんがい排水事業との共同事業として実施されることとなった。

平成3年～4年度に行われた国営かんがい排水事業の工事では、雑割石谷積みという方法による天然石の護岸が整備され、地下水かん養のため、川底には玉石や砂利を敷いて透水性を持たせ、従前の地下浸透効果を変えない方法がとられた。県営水環境整備事業は平成3年～7年度に行われ、内川沿いの遊歩道「学問の道」を整備した。併せて、旧岩出山町の単独事業で「有備館の森公園」の整備も平成6年～10年度に行われた。

各整備計画・工事が進行する一方で、「内川を考える会」を中心に、ボランティアによる清掃、周辺の草刈りや植栽活動等を平成2年度から行っていたが、より組織的な活動として発展させるため、内川沿いの町浦・仲浦親交会、下川原親交会、上中江親交会、共栄親交会（以下「4親交会」という。）に活動への参加を呼びかけ、「内川を考える会」

を母体に、内川沿い集落108戸で構成する「内川・ふるさと保全隊」(以下「保全隊」という。)を平成14年2月に設立した。

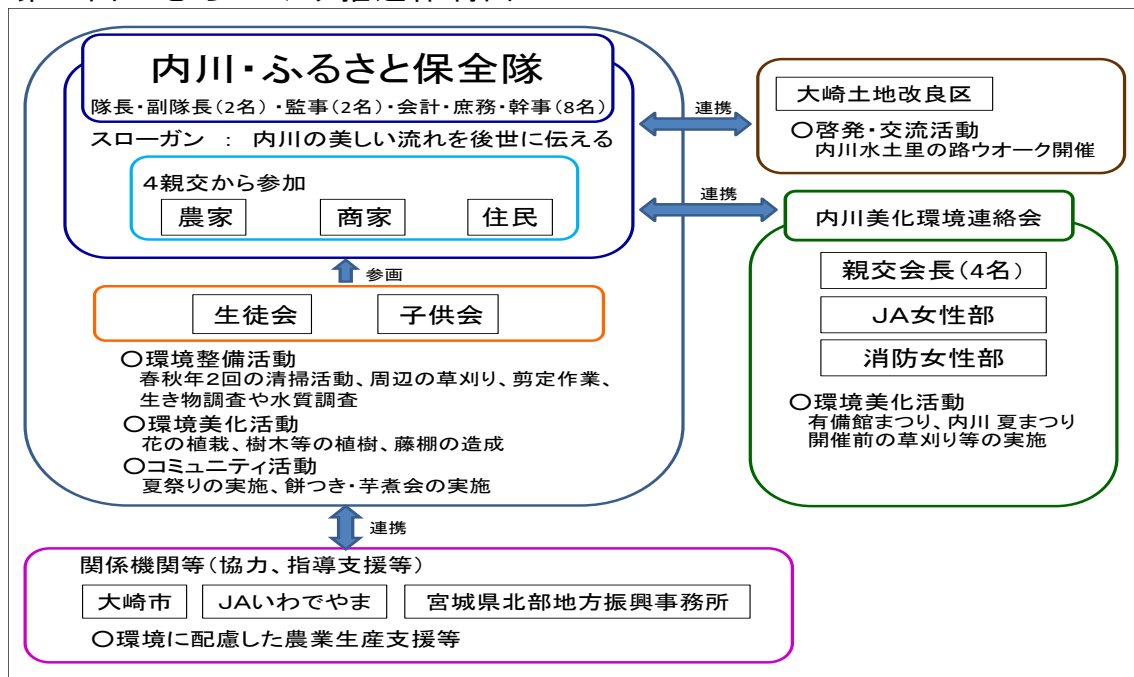
平成14年から「中山間地域等農村活性化事業(中山間ふるさと・水と土保全対策事業)」を活用し、内川の清流を守り、後世に伝えることを目的に、現在まで活動を展開している。

(2) むらづくりの推進体制

保全隊は、4親交会と賛同する一般会員で組織されており、農家、商家、地域の住民で構成されている。平成25年4月現在の隊員数は、104名となっている。

役員は、隊長、副隊長(2名)、監事(2名)、会計、庶務、幹事(8名)の体制となっており、保全隊の主な活動は、土地改良区から受託している春秋年2回の清掃作業と年1回の剪定作業のほか、先進地視察、研修会及び内川沿いでのイベントである。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 保全隊は、「内川の美しい流れを後世に伝える」をスローガンに、地域の環境は地域で守るという視点で地域社会全体による体制づくりに努めており、地域内の幅広い年齢層・多様な団

体と連携し活動を展開している。

- (2) 清掃活動を通して互いの親睦を深めるとともに、住みよい地域づくりを目指して多様な団体がともに活動することにより、互いに協力し合う気持ちや思いやりが生まれ地域が活性化している。また、現在、新たな取組として内川沿いにフジを植樹し藤棚にする作業を進め、隊員の活動意欲の維持・増進と、活動の継続に努めている。



写真2 清掃活動

- (3) 内川は、農林水産省の「疎水百選」に選ばれるなど、その水の恵みは地域内のみならず貴重なものであり、後世に遺す遺産として、内川の保全活動を継続している。

2. 農業生産面における特徴

内川は、地域市街地の下流「大崎耕土」を潤しており、大崎耕土は水稻栽培が中心の穀倉地帯である。これらの農地ではJAの指導により農薬等の使用量を半減する目標を掲げ、環境に配慮した米の栽培に取り組んでいる。水質保全是農業生産にとって欠かすことの出来ない要素であり、保全隊の内川沿線で行う活動はその重要な役割を担っている。

また、地域では転作作物として大豆の生産が行われ、地元産大豆を原料とした特産品の「凍み豆腐」が造られており、凍み豆腐を使った地域内限定メニュー「凍みっぱなし丼」が商品化されている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 生活・環境整備面の取組

内川には、かつて多くの魚類が生息していたが、生活ゴミの流入や周辺地域での農薬の使用により、水質が悪化し、徐々にその姿がみられなくなっていった。しかし、保全隊による水質調査や生態系保全活動が継続的



写真3 生態調査・水質検査

に実施されたことや、近年は減農薬など環境に配慮した農業が行われた結果、^{ばい} ^か ^も 梅花藻が繁茂するなど従来の環境を取り戻しつつある。

さらに、保全隊の活動として、昨年から新たに藤棚づくりを始めるなど、内川の景観整備に意欲的に取り組んでいる。

(2) 都市住民との交流促進

大崎土地改良区が平成17年から開催している「^{うちかわ みどり}内川水土里の^{みち}路ウォーク」では、イベント開催前にコース周辺の草刈りや植栽の剪定等を保全隊が行っているほか、当日もボランティアとして参加し、イベントをサポートしている。

「^{うちかわ みどり}内川水土里の^{みち}路ウォーク」には、県内各地から家族連れなど子供から大人まで幅広い年代が参加しており、内川の水源江合川からの取水施設「^{おおせきとうしゅこう}大堰頭首工」の見学や内川沿いのウォーキングと併せて、植樹体験や枝打ち体験などの体験作業などが行われている。参加者には、農業を支える農業用水、森林、農村、農業用施設の役割についても理解してもらうために、保全隊が案内や説明を行い、日頃の保全活動も含め、都市住民と農村の交流イベントを底辺から支えている。

(3) コミュニティ活動の強化

清流や景観を維持する清掃活動には、女性や子供の姿も多く見られ、活動を通して地域とのふれあいや用水路の大切な役割を学びながら、楽しく気持ちよく活動ができるよう心がけ、活動の後に慰労会を兼ねた餅つきや芋煮会を実施している。

また、地域の子供達で賑わう恒例行事として定着し、毎年開催されているこども夏祭りでは、保全隊の隊員や家族（女性、高齢者）が中心となり、開催準備や運営を行っている。

このように保全隊が中心となり、子供会・生徒会など他の組織を加えて様々な活動をすることで、高齢化している商店街でも共通の話題が多くなり、笑顔での助け合いや協力、思いやりの心が芽生え、地域が和と絆で結ばれるようになった。



写真4 清掃活動後の餅つき